
王女は夢の中で

柊 焰珠

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

王女は夢の中で

【Zコード】

Z7627P

【作者名】

柊 焰珠

【あらすじ】

性別、女。年齢、32歳。職業、専業主婦。そんな私がこのたび子供を生みました。が…、子供を生んだのを機に、旦那の実家に同居生活を始めましたら、一気にストレス一杯振り切つて…。異世界に、トリップ。してしまいました。

あ、れ？ どうしよ…。

夢を、見ていた。

幼い頃から、時折思つて出したよつて見る、夢。

自分の家族なのに、ちよつと違つた服を着て、ちよつと違つた名前を呼ぶ。そんな、夢。

小さな頃、年に一度くらい、見ていた夢。
なじみの夢。

でも、今回。

こつものよつては、『私』に、なりきつていなかつた。

やう・・・。

言つなれば、鏡を観るよつて、窓から外を観るよつて、その光景を見ていた。

よくよく見えるのに、手で、触ることができない。まあ、夢。

いつもと回り、『私』の顔。なの。

『私』が、『私』でないよつた。

そんな、『夢』を。

もう、イヤだ。

百合は今年何度田かになるため息をついた。
せつやつてため息をつくと、見開いた田の奥から涙がゆっくりあ
ふれ出す。

もう、イヤだ。

もう思つてしまつたとたん、抑えていた感情があとからじんわり
と浮上する。

百合は涙といつしょに出てきた鼻水を乱暴にかみ、怒りと共にゴ
ミ箱に投げ捨てた。

百合は主婦だ。夫と生後6ヶ月になる一人娘と、夫の両親の元で
同居している。

持ち家付きの夫と結婚して、娘も生まれて。同居とはいえば幸せ
な部類に属するのだろうと、普段は思うようにしている。
だがしかし。それでも同居は頭が痛い。

理由として夫に告げられるのは些細なことだ。例えば、娘にはテ
レビを見せていいないので、舅姑にはテレビを見せないで遊んでほし
いとか、自分がご飯を食べるときは、娘もご飯を食べる練習になる
ので連れて行かないでほしいとか。

そして、夫に一蹴される。そんなのは無理だ、と。

同居はイヤだ、それをなんとかしようと思つて話してはみるもの
の、夫とのコモリコーションはうまくいかない。

本当は、家にいるだけで気詰まりなのだ。

百合自身が主婦として及第点ではないと自覚しているが、それを
どうにかしようと思えないくらい、気詰まりなのだ。

舅姑は、やさしい、いい人だ。

いろいろと気を使って、便宜を図ってくれる。

だが、いつしょについて何をするというのだろうか。本当の親子でもなかなか世代の溝は埋まらないと言つのに。娘に対するしつけのこと、子育てのこと。自分で考え、思うようにやりたいのだが、なかなかそうはいかない。

けれど、娘のことだけではないのだ。

ただただ、夫が家にいない、舅姑といつしょにいなくてはいけない、それが、気詰まりなのだ。

これは・・・経験しないと何ともいえないだらう。

夫は一緒に実家に帰つてくれず、たまに父母が近くに来たときだけ、気が向けば、会つてくれる。

そんな状態で、百合の気持ちをわかれというほうが、無理な話だ。例えば、実家に帰つたときに娘を夫に預け父母を残し買い物でも出かけたら、その、いたたまれない気詰まりな気持ちを少しは理解してくれるかもしれないが。

もう、イヤだ。

ノイローゼにでもなつたら、親子三人で暮らせるだらうかと、ため息をつきながら思う。

もう、イヤだ。

はじめから思つていたが、ここには自分の居場所は見つけられない。

けれど、その思いは夫には伝わらないわけで。

今日もため息をつきながら、部屋に掃除機をかける。

夫が嫌いなわけではない。

一人で暮らしていた時分には、うまくやっていたし、隣にいて安心できるし、一緒にいたいと思っている。

舅姑も、嫌いなわけではない。時折会う、近所に住んでいる、ならいい人たちだと思うし、夫の両親だ。大事にしたいとも思うだろう。

う。

一緒に住んでいなければ。

一緒に住んでいなければ。

・・・ああ、危ないな。思考が空転しかけてる・・・。

掃除機に集中していないと、大声で叫びたくなってしまつ自分を、半分乖離した意識で捕らえていると、その片隅に、泣き声が引っかかった。

・・・泣き声？ああ、いかなくぢゅーー

娘の寝ているベビーベットのほうに意識を向けると、足に何かが引っかかった。

足、掃除機？・・・つて、転ぶよ、これはーー

思わず手を前に出して、つんのめつた体を守りつと・・・

がつんつ

テーブルの縁に、したたかに額を打ちつけ、意識は暗転する。

ガチャヤ、ガチャガチャガチャガチャガチャ…
具足を身に着けた兵士が、角を曲がり、一心不乱に前を用意す。
…と足が止まり、目的らしい木製の扉を前に、拳を振り上げた。

「ドンドンッ、ドンドンッ

「殿下、急使でありますッ」

微妙にかすれ、緊張に裏返った声。

知っている者はすぐにわかる、戦の空気をまとったそれ。

「入れ」

誰可の別なく、早急に入室の許可が下り、兵士は扉を開ける。
そこは昼間でも薄暗い、陰鬱な部屋だった。
明かり取りのための窓は、小さく、上のほうにしかついておらず、
あまり役に立っていない。

部屋の主は、と見回したが、視線を程よくはずしたところに揺ら
めく、燭台の明かりしか動くものはない。

「所属は？」

「第一軍属第七遊撃隊伝令、ロイス・グランードであります」

反射的に略礼をいれ、直立不動の姿勢をとる兵士。

「聞こづ」

命じることに慣れた、声。固い口調ではあるが、女性の声である。
「先日、未明、フランベルトとの国境で起きた戦闘中、本陣に異変
があり…」

王太子マサーク様以下第一部隊の行方がわからなくなつております

「すッ」

兵士は途中言ひよどみ、最後はほどど怒鳴るよつて報告を終え
た。

「・・・戦況は、どうなっている？」

何かを押し殺したような、小さな声が、兵士がびっくりするほど近くで聞こえた。部屋に分厚く敷かれた絨毯のためだろうか、足音もなく彼女は近づいてきていた。

彼女は、現在、この部屋のかりそめの主。コーレリア・フレイ・エスファーン。エスファーン王国の第一王女その人である。

「将軍は、軍の掌握に努めています。マサール殿下を」自身の側付きとしておいて置かれていましたので、殿下のことにつづいている一般兵はありません。知っている第一部隊は殿下と一緒に出奔・・・。第一隊まで鼠が紛れていなかぎり、まだ大丈夫かと思われます」

「あの子が傷付いていなければの話よね、それは。それで、戦況は？」

落ち着かない様子で部屋を歩き回つつ、コーレリアはつぶやく。

「将軍が掌握している兵士は、約半数。ほぼ第一軍のみです。貴族の切り崩しにかかりっていますが、手ごたえがあつたのはその中でも三分の一程度といったところです」

「フランベルトの動きは？」

兵士よりずいぶんと身長の低い彼女は、顔を心持伏せ、考えをめぐらせるかのようにあたりを歩き回る。

「今のところ、ありません」

その言葉に、彼女の足が止まった。少しの空白の後、きっと、にらみつけるように兵士の顔を見つめる。

「これまで通り、王太子のことは伏せて置くよ」と将軍には伝えなさい。国境にはからず増援を派遣するから、一週間、いや、一週間待つように、とも。あとフランベルトにいれる細作を増やして、中央できな臭いことが起きていないかどうか調べなさい。それから、こちら側につかない領主はいらないから、そこにも細作をつけて探ること。

あと、は・・・。

王太子の搜索に、人手を割く必要は、ありません。それほどの余裕は、ないはずです」

「ですが、それでは」

「彼女の言葉にびっくりした兵士は、思わず声を上げた。

「国境が片付いた後、王太子負傷の報をあげなさい。今下手に動いては、フランベルトに余計な情報を与えることになります。下手に動いて王太子を人質に取られては、なすすべもありません。

それに。

本陣での異変は、造反の領主が動いたと見ていいでしょう。王太子以下第一隊がこぞつていないのであれば、それに気づいて身を隠したのかもしれません。国境の小競り合いに乗じて、横から勝利をさらうような動きをするかもしれませんが、それはそのとき対応なさい。もしも、王太子の動きがないなら……」

彼女は不自然に言葉を切り、息を整える。

「すべて、国境を片付けた、そのあとで。

必ずマサークを、連れ帰りなさい。いいですか、必ず、ですよ」

声が、不自然に震えるのを両手で押さえ、彼女は言い募る。

「必ず、増援は送ります。一刻も早く、こち側に有利に事を運び、マサークを連れ帰りなさい」

背を向け、だが毅然と前を向き、彼女は言い切った。その言葉に、兵士は無言で答礼する。

「いきなさい。そしてエスファーンに勝利を」「はっ」

拍車をならし、答礼。兵士が退出し、扉が軽くきしみを上げたその部屋の中に残されたのは、彼女一人。

「父上……」

どうして逝かれたのですか。まだ、私たちには荷が重いのに。どうして どうして……」

その言葉を聞く者は無く。
彼女の慟哭は、闇へと消えた。

侍女ルシアの朝は早い。

いや、早かつた、というべきか。

彼女の使えるべき主。このエスファーン王国の、現在唯一の正統な王位継承者である、コーレリア・フレイ・エスファーンが人事不省に陥るまでは、の話である。

とはいって、女官ではなく、コーレリア付きの侍女であるルシアには、彼女の主がいつ目覚めてもいいように、彼女の身の回りを整え、主の声がいつかかってもよいように側で控えるくらいのことしか、できることはなかった。

エスファーン王国は、北の大地の山々と、湖とに囲まれた小国である。

天を支えると言い伝えられている、ガルブレイス連峰。そしてその只中にある、わずかな平らな台地。天の瞳を映すというノルドルン湖。それらがエスファーン王国のすべてといえるだろう。

氷の魔物、すべてを等しく葬る霜の巨人、太古の神々の落とし子を、ノルドルン湖に封印したとされるのが、エスファーンの祖。その成立ゆえに、古王国とも称されるエスファーンには、領土を広げる野心はなく、いくつもの国の盛衰を、北の大地でひつそりと見守つていていたに過ぎなかつた。

だが、ここにきて事態は急変する。

大陸の中央部にある、いくつかの小国の中の一つであったフランベルトが、周囲の国々に対して宣戦布告したのである。

フランベルトは、貪欲に周囲の国々を飲み込み、他を圧して霸道を進んだ。フランベルト国王自身が大陸を統べる者として帝王を名

乗り、次々と国を併呑。そして古の王国にまで牙をむき出したのである。

対するエスファーンは国土のほとんどが険しい山であり、国土の割には人が生活できる場所はあまりなく、人口は少ない。早々に白旗を揚げて吸収合併されるか、フランベルトの軍隊に国土を蹂躪されるかであろうと、大方のものは予測していた。

だが、これも大きく予測を外れることとなる。

フランベルトが進軍する際の、ほんの小手調べというほどの小競り合いが国境付近で起こった後、フランベルトは軍を引いたのである。

その際の、主な計略の立案者とされるのが、現在エスファーン王国の第一王位継承者であるコーレリア・フレイ・エスファーン。彼女の眼は、いまだ閉ざされたままである。

「姫様、日は高く上がっていますよ。

今日もすいぶんとお寝坊さんですね」

ルシアは、今日も声をかけながら、窓にかかつた分厚い綾帳を引いた。

「皆さん、心配なさっていますよ。そろそろおきて下さいな

宫廷侍医ガネーシャ・トライフォーンは、代々学者や医者を輩出することの多い家系に生まれおちた。父親は宫廷侍医。母親は王城薬草園師。そんな中で育てられ、自身も自然と医術に关心を持ち、医者となつた。王城に入り宫廷侍医となつたのは、王城の女性医官が退職したためであり、縁故といわれればそうなのだが、王城に自力で仕官する実力も十分に兼ね備えた宫廷侍医である。そんな彼女は、第一王女と年が近いせいなのだろうか、宫廷侍医の称号をいただいてからはユーレリア王女を診ることが多くなつていた。ガネーシャは両親ともに王城で働いていた関係上、王女と直接の面識もあり、遊んでいただいたこともある。必然的に王女との会話が多くなり。気の置けない友人関係を作るまでにいたつていた。

王女は、その身分からしてみると、意外なほど気さくな人物である。容姿も、行動も、一国を負うとは言いがたいほど、普通。時と場合に応じて取り繕うことも見知つてはいたけれど、ガネーシャにしてみれば、王女然としたところが無い、非常に付き合いやすい貴族であった。そして、年が近いとはいえ王女のほうが少々年上とあつて、ある程度は頭が上がらなく、頼れる姉貴分といった関係であつた。

そんな第一王女だったが、オジオン国王の突然の崩御に当たり、立場が一変した。

もともと王位継承者の少ない小国。

第一王女マルグリットはすでに斎姫でありノルドルン湖にて祭儀に尽くしており、第一王位継承者として押されているとはい、マサール王子は成人して間もない。必然的に国王の補佐をしていたユーレリア王女も、未だ輿入れの予定はないということで国政に参加することとなつたのである。

国王崩御以前。オジオン国王は、まだ国王としては若く、マサー

ル王子にはまだ国王になるには若干の猶予があるだろうといつ予測の元、これからオジオン国王の下について政治を学んでいくこととなっていた。ユーレリア王女も、王位継承者が少ないことから国外へ嫁いでいく可能性は少なく、自国内のある程度以上の身分を持つものへと嫁ぐ、だろうと思われていた。しかし、国王崩御、それに引き続いてのフランベルト王国の侵略行為、それに付随して巻き起こつた一連の騒動。めまぐるしく状況が移り変わる中、国王としての采配を彼女は求められたのである。

ユーレリア王女は、それに答えた。

すべてが終わる、つまりフランベルト側が軍をひいたと王城に報がもたられるまで、王女は其処に立っていたのだと聞く。

「ユリ姉様。無茶しそぎだよ、まったく」

メルグリット王女二十歳。ユーレリア王女十八歳。マサール王子十五歳。

見たい人にとっては、国王の血のなせる業、なのだろうが。

普段のユーレリアを知る人にとっては、痛々しいものでしかなく。ガネーシャの心を占めるのは、若干の苛立ちと、焦燥で。

「早く戻つてこないと、怒りますよ」

朝一で、ルシアが呼びにくるだろ？あの子は心配性だから。と、往診鞄を点検しなおすガネーシャ・トライフォーンの姿があつた。

「姫様、日は高く上がっていますよ。

今日もずいぶんとお寝坊さんですね」

第一王女付筆頭侍女、ルシア・セレイゾは、今日も声をかけながら、窓にかかった分厚い緞帳を引いた。

「皆さん、心配なさっていますよ。そろそろ起きて下さいな」

天蓋を覆う紗を心持ち空け、風を通す。いつもなら部屋に入るなり目を開ける王女だが、人事不省に陥っており、応えを返す声は無い。宫廷侍医が、過労と睡眠不足と極度の緊張による一時的な意識の混濁といつてはいたが、今日で三日目。心配は募るばかりだ。天蓋から垂れる薄い紗が揺れる。窓を少し開けたせいか、風に揺らめいたのだろう。

「・・・う・・ん」

寝台の中から声が聞こえた。あわててルシアは駆け寄る。

「・・・あ、れ・・・?」

大きく見開いた眼を、数回瞬く。どうやら、ルシアの主人ユーレリアは、状況を把握していないらしい。

「・・・ここ、は」

「姫様の寝室ですわ。執務室で倒れられた後、こちらに移ってきたのです。

「ご気分は、いかがですか?」

(いつたい、何・・・?)

天野百合は、混乱していた。

したたかに打ち付けた額はまだ痛く、ずきずきとした痛みが、妙に現実感を誘う。が

見慣れない、というか見たこともない天蓋付きの寝台。四方の柱

はぐどすぎなによつ彫刻が入り、すかしの入った薄い紗が垂れ下がつてゐる。びっくりして体を起こそうとすると、すかさずルシアが助け起こした。

（・・・由美子さん？！　に、似てる・・・）

体を起こす際に、すきりと、ひときわ頭が痛んだ。

かいがいしく背中にやわらかいクッションを当て、肩に薄物をかけたルシア。しかめられた眉を見ると、急いで立ち上がつた。

「まあ、姫様。私としたことが、つい、忘れていました。

急いで侍医を呼んできますね」

軽く叩頭すると、ルシアは急いで部屋を出て行つた。

「・・・はあ

百合は緊張していたのか、彼女が出て行つたとたん、ため息をついた。

「一体全体、何がどうなつてゐるのよ・・・」

いつもの癖で、頭をふるふると振つた。が、額の痛みに悶絶する。その痛みで思い出したことがある。たしか。自分は掃除機をかけていて・・・コードに足を引っ掛け、額を机の角で強打。そのあと、夢を見たのだ。

小さい頃から時折、思い出したよつに見ていた、夢。ちょっと違つた自分になれる夢。

今回はだいぶ成長していく、入れなかつた父上の執務室に入つていた。そして・・・

「フランベルトと小競り合い、克の行方不明・・・。
つて、まさか。ここ、Hスファーン王国とか、言わないわよ・・・。
ね？」

思いついたこと、が、ある。思考に反応して、思わずぱつと手を見る。

この間、ざつくりと包丁を入れてしまつた指の傷が、ない。主婦湿疹とアカギレで関節が太く、なつていなかつた。それどころか爪がき

ちんと手入れされていて、きれいに磨かれている。

「つてことは・・・」

前ボタンになっていた寝間着の前をはだけて・・・

「張つていなし、というか、おっぱいの気配、ビニ?」

まだ三時間おきにあげている母乳のおかげで、ダイナマイツになつていた胸が、元のBカップにもどつて、いた。いつもなら、パンパンに腫れて母乳が染み出していないとおかしいのだ。そして視線はそのまま下にむかい・・・、

限界まで大きくなつたお腹に走つた、亀の甲羅の模様に似た、妊娠線。子供を産んだ後、中身がなくなつたため、一気にしわしわになつた下腹。だつたのだが。

「妊娠線が、ない」

トントン

呆然とつぶやいたところで、扉が叩かれた。

「どなた?」

あわててボタンを閉めながら、百合は声をかける。

「ルシア・セレイゾです。

富廷侍医トライフォーン様をお連れしました」

「入つて」

ざつと身支度を終えたことを確認し、答えを返す。

「ユーレリア殿下、おはようございます。お気分はいかがですか?」
ふわりと微笑みながら声をかける富廷侍医トライフォーン。同年代ぐらいなのだろうか。赤みがかった茶色の短髪の、男装をしている女性。言葉遣いは丁寧なの、その笑みには気安さが覗いている。

「・・・トライフォーン?」

「はい、殿下。

ちょっと失礼しますね」

手をとり、脈を計る。首に手を当て、腫れを確かめる。眼を診る。

「熱もなし。大丈夫そうですね。」

他にどこか、痛いところなど、ありますか？

「頭。

・・・というか、よく聞いてほしい。

貴方、誰？ 私、誰？ ここ、何処？

「ガーシャ、ガーシャ、早く来てっ」「ドンドンドン、と、気の急いた叩音と共に、女性医官控え室の扉が開けられた。往診の時間にはまだ早いが、めつたにないルシアの無作法と小さく抑えられた声に混じる喜色に、ガネーシャの心も震えた。

「ユリ姉様が、眼を覚ました？」

往診鞄を引っかみ、ルシアを置いて真っ先に部屋を飛び出しながら、ガネーシャは声を抑えてルシアに訪ねた。

「姉様、じゃなくて姫様、でもなくて殿下ですっ」

「それであなたが迎えに来たのは・・・まだ、体調が悪そうに見えるから？」

かりにもエスファーン王国の第一王位継承者であらせられる。直属の侍女はルシア一人だが、控え室には常時何人かがいて、下働きをしているはずだ。女性医官を呼びつけるのなら、なにもルシア本人でなくても事は足りる。

「・・・ではなくて、嬉しくってつい走ってきたって感じかしら」

嬉しくって、誰かに言いたくて、そのまま女性医官控え室まで大急ぎで来たんだね・・・。一人残されたユリ姉様、びっくりしているんじゃないかな。

「そこまで判るなら、何も口に出さなくてもいいじゃないですか」

「悪いね。当てちゃって」

同年代であり、同じような身分の二人は、気心の知れた友人でもある。久しぶりに軽くじやれあいながらも、足早にコーレリア王女の居室に向かっていた。

トントン

心持緊張して、ルシアが扉を叩いた。

「どなた？」

中から誰かの声がして、一人の顔に満面の笑みがこぼれる。

「ルシア・セレイゾです。

宫廷侍医トライフォーン様をお連れしました

「入つて」

ユーレリア王女の声に促されるよう、部屋に入り、一人は見た。ここ三日ほど寝ている姿しか見ていなかつた王女が、寝台の上に座つている姿を。

「ユーレリア殿下、おはようございます。お気分はいかがですか？」ユリ姉様、よかつた・・・。深い安堵に夢見心地であるきながら、ガネーシャは王女の座る寝台の横まで歩みを進める。

「・・・トライフォーン？」

「はい、殿下。

ちょっと失礼しますね」

手をとり、脈を計る。首に手を当て、腫れを確かめる。眼を診る。一連の動作はガネーシャに染み付いていて、めつたなことでは間違えることはない。

「熱もなし。大丈夫そうですね。

他にどこか、痛いところなど、ありますか？」

「頭。

・・・というか、よく聞いてほしい。

貴方、誰？ 私、誰？ ここ、何処？」

「え・・・あの、ユリ姉様？」

「ごめんなさいね。

貴方、誰？ 私、誰？ ここ、何処？」

ユーレリア王女の申し訳なさそうな顔が、いつそう、ガネーシャの心に痛かった。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n7627p/>

王女は夢の中で

2011年9月21日03時27分発行